

間 接 的 な 言 い 回 し

— 形容詞文を中心に —

李 奇 楠

1. はじめに

直接的な言い回しは字義どおりの意味、例えば形容詞述語文の場合、人や物の属性や状態、話し手の感情、感覚を字義どおりに言い表わすものを指す。それに対して、間接的な言い回しは字義どおりの意味より言外の意を話者の意図の中心とするものを指す。間接的な言い回しとして使われる形容詞述語文には会話の含意 (conversational implicature)⁽¹⁾が存在する。もちろん、間接的な言い回しは形容詞述語文だけではなく、名詞述語文や動詞述語文にもあるが、今回は形容詞述語文を中心に考える。その間接的な言い回しにはまた一般の間接的な言い回しと特殊性のある間接的な言い回しがある。⁽²⁾ 本稿は一般の間接的な言い回しとして使われる形容詞述語文の会話含意について具体例を挙げながら論述する。

2. 「食欲ないわ」について

本節ではまず次の例を考える。

(1) 朝雄「そろそろお昼にしようか」

きゑ「食欲ないわ」

朝雄「だめだよ、食べなきゃ。まだ先長いんだから」

(夏休みのサンタさん)

例 (1) は息子朝雄と母きゑの会話である。きゑの「食欲ないわ」⁽³⁾という発話は字義どおりの意味が「食欲というものが非存在」である。しかし、その前に息子朝雄の「そろそろお昼にしようか」という質問の発話がある。ふつう論理的に考えれば、もし「そろそろお昼にしようか」と聞かれたら、「お昼にする」か「お昼にしない」というYes、Noの答えを与えるはずだが、実際の日常

会話ではそうは簡単にならないケースが多い。たとえば、例(1)のような「食欲ないわ」という間接的な答え。つまり、一見「そろそろお昼にしようか」という質問と関係がないような答えである。ここでいわゆるグライスの「関連性のあることを言え」という関係の格率に違反することになっている。それで、協調の原則によれば、言われた事柄のレベルつまり字義通りの「食欲というものが非存在」という状態の叙述では関係の格率が侵害されているものの、含みとされた事柄のレベルではその格率（あるいは少なくとも全般的な協調の原則）が遵守されているものだとし聞き手側が考える。その含みとは何か。その含みについて今回はスペルベルとウイelsonの関連性理論を頼りに考えてみる。関連性の原則によれば、人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。そして、最適な関連性の見込みは意図明示的に伝達されている。最適な関連性の見込みというのには次の(a)と(b)が含まれている。

(a) 意図明示的の刺激は受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性がある。

(b) 意図明示的の刺激は伝達者の能力と優先事項に合致する最も関連性のあるものである。⁽⁴⁾

だから、伝達者である母きゑの発話「食欲ないわ」は受け手息子朝雄にとって、処理する労力に見合うだけの関連性があるはずである。それに、「人間の認知過程は可能な限り最小の労力で可能な限り最大の認知効果を達成するような仕組みになっている」⁽⁵⁾から、この例(1)での「食欲ないわ」が当然「そろそろお昼にしようか」に対する答えになるのだと受け手の朝雄にはうけとめられる。ふつう食欲がないなら、食事をしたくないのである。これは基本的な人間の日常生活の常識である。伝達者はここではただ「食欲がない」という前提だけを提出し、「食事をしたくない」という真の答えになる結論を省略している。つまり、「食欲がない(から、お昼にしたいわ)」という因果関係の結果の部分明らかになっている。言い換えれば、例(1)きゑの「食欲ないわ」という発話は「お昼にしたいわあるいはお昼を食べたくない」という会話の含意を間接的に表しているのである。

もちろん、通常の発話の理解は、ほとんど瞬間的なものである。グライスの協調の原則にしても、スペルベルとウイルソンの関連性理論にしても、いずれも人為的なものではなく、人間の発話理解における認知メカニズムの一環になっているものであり、直ちに呼び出し可能なものだけである。だからこそ、例(1)では、息子朝雄は母きゑの「お昼を食べたくない」という言外の意がすぐ読み取れて、その母の否定的な答えに対して、「だめだよ、食べなきゃ。まだ先長いんだから」という否定的な評価およびその理由を述べたのである。

3. 非特殊性の間接的な言い回し

次の例も一見関係の格率に違反しているが、関連性の原則と因果関係の「pであるからqである」という論理的思考により、話し手の本意がとらえることができよう。

(2) 僕はポケットから煙草を出して、火を点け、彼女の作業をしばらく眺めた。

「ねえ、もしよかったら一緒に食事しないのか？」

彼女は伝票から目を離さずに首を振った。

「一人で食事するのが好きなの。」

(風の歌を聴け)

(3) 萌子「あなた、ちょっと、ぬかみそかき回しといてくれない？」

亜里沙「やだよ」

(夏休みのサンタさん)

(4) 私はエディと共に喫茶店を出て、近くの縄のれんに入った。

「酒は、何にします」

エディに訊ねた。

「そうね、ウイスキーがいいね」

(一瞬の夏)

次の例(5)は質の格率に違反することになる用例である。

(5) 吾一は道雄の説明を聞きながら、うまかったものだから、砂のよう

な、ざらざらしたおりまで飲んでしまったが、舌の上にごそごそしたものが残った時、

「—だけど、なんだね、サトウ湯のほうがうまいね。」

と、その割りにうまくなかったような批評をした。

(路傍の石)

例(5)の「サトウ湯のほう

がうまいね。」という形容詞述語文の発話は、サトウ湯の味がよい様子を表す字義どおりの意味より、出してくれたコーヒーがそれほどおいしくないという意味を間接的に強調している。発話の前にある「彼(吾一のこと)は恐る恐るくちびるをつけてみた。なるほど、色は黒いけれども、あまくって、うまかった。」という叙述からみれば、発話者吾一が嘘をついたことが分かる。つまり、グライスの「偽だと思ふことを言うてはならない。」という質の格率が無視されている。このことで会話の含みが盛り込まれることが明らかになっている。その含みとはいったい何か。それを求めるには聞き手道雄と話し手吾一との関係、二人の家庭背景などの既知の情報から考えなければならない。道雄は吾一と同じ学校の同級生で、二人とも成績がよいが、道雄のうちでは彼がほしいという本をなんでも買ってくれるのに対して、吾一のうちは貧乏で、ほしい本を自由に買ってもらえない。道雄は吾一に本を貸してやるといっても、吾一にいつも貸してほしくないと言われている。本でも、おもちゃでも、道雄はとにかく吾一の知らないようなものを持ち出しては、吾一にいつも反発されている。以上のようなことを総合的に考えれば、今回のコーヒーの件も同じ反応をされたと言えるであろう。つまり、「また、俺の知らないようなものを突きつけて、何を。」という反発の会話の含意がその「サトウ湯のほう

がうまいね。」という形容詞述語文の発話を通して、表現されていると聞き手道雄には推測できるであろう。

次の例は「十分な証拠のないことを言うてはならない。」という質の格率に違反するケースである。

(6) 峰和「お前、酔ってるな？」

由香里「少しね」

峰和「止せよ、女の子がみっともないぞ」

峰和、立って自分の部屋へ去る。

由香里、一寸唇をとがらせて。

(卒業写真)

単に「女の子がみっともないぞ」という発話をすれば、フェミニストに強く反駁されることになるであろう。なぜみっともないのは女の子の方だけだと決めつけるのかと。「女の子がみっともないぞ」という形容詞述語文はその字義どおりの意味では「十分な証拠のないことを言ってはならない」という質の格率に違反している。ここは娘由香里と父峰和の会話場面である。関連性の原則によれば、父峰和の「女の子がみっともないぞ」という発話は聞き手の娘由香里にとって、最も関連性があるはずである。そしてもう一つの前提、すなわち「由香里が女の子である」ということが会話の参与者父峰和と娘由香里二人にとって、顕在的なものである。そこで、娘由香里は話し手父峰和の言外の意が推論できる。つまり、「女の子がみっともない、(あなたは女の子だから、あなたがみっともないぞ)」という娘のことを指摘しているのである。発話の前にある娘由香里が父峰和のうしろから抱きつく動作と自分が少し酔っているのを認めた文脈とも関連して、娘由香里は父峰和のその言外の意をさらに確実に捉えたであろう。

(7) 新しいおちょうしを持ってきた小おんなをつかまえて、次野はいった。

「ええと、おまえはあまいものがいいんだろうな。—きんとんを1人まえ。」

「あの、手まえどもには、きんとんは……」

「しょうがねえな。きんとんぐらい、こしらえておけよ。それじゃ、なんかほかのものを……」

「先生、そんなに、もったいのうござんすよ。」

「はははは。おまえも、もったいないって事を、いうようになったかなあ。大きくなったもんだなあ。ところで、学校はどうした。」

(路傍の石)

話し手吾一が先生に対して「もったいのうござんすよ。」という発話をして、

むろん字義どおりの「それを使うのが惜しい」という意味になっているが、ここの文脈、つまりいっぱいご馳走をしてくれる次野先生がまた吾一のためにほかの食べ物を注文しようとしているとき、と関連すれば、話し手の「それ以上注文してくれなくてもいい」という婉曲な断りの推意が分かる。話し手と聞き手の「生徒一先生」という人間関係から、リーチのいう「丁寧さの原則」が明らかに働いていることも十分理解できる。

例(7)と似たところがあり、次の例(8)における形容詞述語文の会話の含意も「丁寧さの原則」から生み出している。

(8) 合宿のあとも、これは大きな争点になっていく。

「だれか一人が決めるのはおかしい」

「真理さんが編集長になるのは反対です。」

はっきりと、そう言われた。

(iモード事件)

「だれか一人が決めるのはおかしい」という属性叙述の形容詞述語文は例(8)の場面で使われると、「分りやすい言い方をすること」という様態の格率に違反することになる。要するに、ただ「だれか一人が決めるのはおかしい」という客観的な属性叙述なのか、それともある特定の独断の人を非難するのか、文レベルから判断しにくい。上記例(8)の前後の文脈から後者の方に使われることが分かるであろう。つまり、「真理さん一人が決めるのはおかしい」「真理さんの意見に反対です」という言外の意を表している。なぜ自分たちの意図を伝える際に、間接的なやり方をするのか、やはりリーチの言う「丁寧さの原則」をできるだけ破らないように話し手は努力しているからである。大まかに言うと、その原因は礼儀にかなうとは言えないような信念を表す表現は最小限に抑えることである。次の例(9)も同じことが言えるであろう。

(9) 車が近付くにつれ、尾島の顔が青ざめた。

「尾島帰れ！」

「社長は一人で沢山だ!」

「能なし尾島体制、フンサイ！」

といったシュプレヒコールが、純子の指導のせい、なかなか決ま

っている。

(女社長に乾杯！)

(10) 「そんな意地わるしないで、貸してくださいよ。」

「何が意地わるよ。小僧のくせに新聞読むなんて、ぜいたくだわ。」

「新聞ぐらい、読んだっていいじゃありませんか。ちょっと貸してくださいよ。読みたいものがあるんですから……」

(路傍の石)

「ぜいたくだ」の字義どおりの意味は実際の生活が必要とする以上の、分に過ぎた消費なのである。例(10)の「小僧のくせに新聞読むなんて、ぜいたくだわ。」という文の意味は、「吾一が小僧の身分で新聞を読むことは必要以上の、分に過ぎた消費である」となる。ここでのこの発話は、ただ小僧の吾一が新聞を読むことについて、「ぜいたくだ」という形容詞述語でその性質を描写するだけではなく、それ以上の会話の含意がある。それは、その直前に吾一の「そんな意地わるしないで、貸してくださいよ」という依頼の発話があることである。それに対する「小僧のくせに新聞読むなんて、ぜいたくだわ」というかよ子の答えは表面から見れば、その前の依頼と関係がないようで、会話の関係の格率すなわち「関連性のあることを言え」ということに違反しているからである。違反が表だけにとどまり、深層レベルでは会話者がやはり協調の原則を守っている。それで、聞き手側が次のような文脈関連の推論をする。「小僧のくせに新聞読むなんて、ぜいたくだわ。(だから、新聞を貸してあげない。)」。カッコの中にある「新聞を貸してあげない」という部分は話し手の発話の意図である。聞き手吾一はその会話の含意—自分の依頼に対する拒絶を形容詞述語文を通して正確に捉えたから、二度目の依頼、すなわち「新聞ぐらい、読んだっていいじゃありませんか。ちょっと貸してくださいよ。」という発話をしたのである。

(11) 「—それじゃ、もう社長じゃないの？」

と林昌也は言った。

「うん。—嬉しい？」

と、伸子はいたずらっぽく訊いた。

伸子のアパートである。今日は珍しく伸子が手料理を昌也に食べさせたのだった。

「君が嬉しいなら僕も嬉しいし、悲しいなら僕も悲しいよ」

「うまい返事ね」

と伸子は微笑んだ。

(女社長に乾杯！)

例(11)の「君が嬉しいなら僕も嬉しいし、悲しいなら僕も悲しいよ」という発話の言外の意を捉えるため、上述の関連性の原則以外に、文脈関連の条件文の推論をすることになっている。つまり、聞き手は「pであればqである」という論理的思考を働かせ、話し手の会話の含意を汲み取る。この例の文脈関連の情報話し手昌也、聞き手伸子二人とも知っている事実を指している。もともとお茶くみ同然だった伸子がある日、ちょっとした間違いで、会社の社長になってしまった。いろいろ大変なことを経験してから、社長でなくなった。それは伸子にとって、望ましいことで、嬉しいことなのである。だから、昌也の発話は実際「嬉しい」という気持ちを伝えている。

4. まとめ

本稿は会話の含意理論すなわちグライスの協調の原則、リーチの丁寧さの原則及びスペルベルとウイリソンの関連性の原則にもとづいて、日本語の発話の中に現われる形容詞述語文の会話の含意を考察したものである。具体的な用例にもとづいて日本語形容詞述語文の言外の意に関する推論のメカニズムを考えてみた。その基本的な推論手順の内容をまとめてみれば、以下のようになる。

(1) まず会話の含意があるかどうかを判断する。もし文レベルで協調の原則、具体的にいうと量の格率、質の格率、関係の格率と様態の格率に違反するならば、言外の意が含まれるはずである。

(2) ついでその含まれている話し手の会話の含意を引き出すため、丁寧さの原則および関連性の二つの原則（つまり認知原則と伝達原則）を手がかりに分析する。もちろんそれと同時に発話前後の文脈（言内の文脈、時としては言

外の文脈つまり話し手、聞き手共に知られる前提、共有の知識ないし社会的背景・文化) と関連して考える必要がある。

(3) 最後は理由文 (p であるから q である)、条件文 (p であれば q である) のような論理的思考を働かせ、明言されていない会話の含意を埋め合わせる。

ことば自身をもつ意味と言語の使い手がことばに持たせる含み、言い換えれば話し手が言ったことと話し手が含みとしたことの区別が指摘されることは会話の含意理論の要をなすところである。それぞれの具体例についての分析からも分かるように、発話における形容詞述語文の会話の含意は実に多様多彩で、語用論的研究の重要性を間接的に物語っている。例文の出典は文学作品で現代の小説に依拠しているが、結果的に最近の作品とやや古いものが混じることになってしまっている。今後は出典をより厳密に精選して進めていきたいと考える。

注

- (1) 「conversational implicature」の日本語訳がいくつかある。「会話の含意」(Leech1983の池上・河上訳、Levinson1983の安井・奥田訳) 以外に、たとえば、「推意」もしくは「語用論的含意」(小泉保1990)、「会話の含み」(Grice1989の清塚訳) などがある。
- (2) 特殊性のある間接的な言い回しはいわゆるメタファー、同語反復的な表現およびアイロニーなどを指している。
- (3) 「ない」という形容詞は日本語の中で特別な単語の一つである。なぜかという、その反対語は「ある」という動詞で、形容詞ではないからである。また、丁寧な形で表現する時、「ないです」以外に「ありません」という動詞「ある」の否定形もよく使われる。
- (4) Sperber D, Wilson D(1995)の日本語訳p331。
- (5) 同上。

参考文献

今井邦彦(2001)『語用論への招待』 大修館書店

- 遠藤織枝(2000)「日本の戦争責任を謝罪することば」『社会言語科学』第3巻第1号
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典』第6巻術語編 三省堂
- 金水 敏・今仁生美(2000)『現代言語学入門4意味と文脈』岩波書店
- 小泉 保(1990)『言外の言語学—日本語用論—』三省堂
- 仲本康一郎(2000)「アフォーダンスに基づく発話解釈—『行為の難易度』を表す形容詞文
—」『語用論研究』第2号 日本語用論学会2000 50—64
- 西尾寅弥(1972)『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 樋口文彦(1996)「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞」『ことばの科学』7 むぎ書房39—60
- 山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- Grice, H. P. (1989) *Studies in the way of words*, Harvard University Press (清塚邦彦
訳 (1998)『論理と会話』勁草書房)
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987)
『語用論』紀伊国屋書店)
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press (安井稔・奥田夏子訳
(1990)『英語語用論』研究社出版)
- Sperber D, Wilson D (1995) *Relevance: communication and cognition* Basil Blackwell,
Oxford (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳 (1999)『関連性理論
—伝達と認知』研究社出版)

(り きなん)